

おのきた

尾北校長室から

第25号



「離見の見」～ もうひとりの自分

本を一冊読むと、一つだけ新しい言葉を覚え、そのことについて考えるようにしている。宇宙飛行士・野口聡一さんが著した『オンリーワン』という本は、改めて「**離見の見**」について考える機会となった。宇宙遊泳中、ふと頭に浮かんだのが、この言葉だったという。地球を離れたところから見て、初めて地球の素晴らしさが分かったという趣旨である。この言葉は、室町時代の能楽師・世阿弥（1363-1443）の言葉のようである。演者は、自分の後ろ姿は見えない。だからこそ、**観客の視点で自分を見て、初めて自分の姿を見ることができる**、と教える。反対に、自己中心的な狭い見方は「**我見**」といい、自己満足に陥ることを戒める言葉である。



野口さんがふと世阿弥の言葉を思い出したように、「離見の見」という言葉で、私は『何でも見てやろう』という本を思い出していた。小田実が29歳の時に著した、アメリカから始まる世界一周旅行記である。その本に触発され、28歳の夏、アメリカ大陸を横断する旅を企てたことがあった。東海岸のニューヨークから始まり、最後は西海岸ロスアンゼルスまでを渡り鳥のように飛行機とバス、鉄道を乗り継いで行く1カ月の旅——わずかな荷物を背負い、寝る場所は前日に決めながら、時に空港やバス停で寝込みながらの自由な一人旅だった。



その旅の一コマ、NYからワシントンD. C. に向かう駅でのこと。電光掲示板の出発ホーム欄が空欄だったので、そこにいた人に尋ねると「分からない」という。それではと、優しい老婦人に訊いてみると、やはり「知らない」という。相手にされていない苛立ちを感じながら、駅員に問うてみたが「分からない」。ウロウロしているうちに予定時刻を10分ほど過ぎて突然、電光掲示板がそれを告げた。この国

では物事が時間通りに進まないことが多く、どの列車が早く到着するかは直前まで特定できないという事実——駅員にも「分からない」と言わせる背景は、日本では予想できないことからだった。

外国を旅すると、人や文化は「多様」であることが肌で感じられる。**それ以上に分かったのは、意外にも我が日本の文化の姿**である。先の駅でのやり取りからは、時間に正確な日本社会の姿が見えてくる。**自らは見えない自らの姿**、まさしく「離見の見」ではないかと思うのである。

異文化は新しい発見に満ちている。しかし、何も外国に行かなくとも、自分の気付かなかった姿を新たに発見する機会はいくらでもある。「メタ認知」という考え方に着目したい。“meta-”は「高次の」を意味する接頭語で、メタ認知とは、「**もうひとりの自分**」がいて、今進行中の自分の思考や行動そのものを対象化して認識する（＝主観的ではなく客観的に見ていく）ことである。

北高生には日常生活の中で、「もうひとりの自分」を意識してもらいたい。「我見」になってはいないか、と時に振り返ってみることを心がけるようにしてもらいたい。「離見の見」、メタ認知ができる力は、文字通り、より「高次の」精神活動の所産——人として大切な能力の一つである。

「**発見の旅とは、新しい景色を探すことではない。自分の中に新しい目をもつこと**」

(マルセル・ブルースト)